# A Bride in Underground-Castle

# 地底魔城の花嫁　２

## 芳流（kaoru）

**https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19913674**

ダイの大冒険, ヒュンケル, マァム, ヒュンマ, モルグ, レオナ, ロモそく2

不死騎団長継続路線のヒュンマ。
突然、不死騎団長の妻とされたマァムであったが、地底魔城で過ごすうちに、少しずつ、ヒュンケルの人となりを理解していく。
ヒュンケルが人間の身でありながら、人間と戦う理由は何か。
そして、王女レオナも祖国奪還のために動き始める。

2023.5.20　ロモそく２合わせ。

# 地底魔城の花嫁　2

　与えられた自室のリビングで、椅子に腰かけたマァムの目の前に、背筋を伸ばしてモルグが立った。彼は、コホン、と咳払いを一つし、マァムに説明を始めた。
「では、よろしいでしょうか。」
　よくわからなかったが、とりあえず、マァムはうなずいた。モルグが彼女に礼儀を払ってくれるのはもうわかっていたので、幾分か、彼女も安心していた。
　モルグは、丁寧にマァムに語り掛けた。
「貴方様は、ヒュンケル様の奥方様として周知されました。
　ですので、我々、この地底魔城の者たちも、貴方様をヒュンケル様の奥方様としてお迎えいたします。」
　その言葉に、マァムは、反論しようと口を開いた。
「で、でも、私は・・・。」
「ここは、です。」
　マァムの声を、モルグは強引に遮った。
「実質ではなく、建前の問題でございます。
　この城には、ハドラー様やほかの軍団長様方も、時折、訪れます。
　また、この城に仕える者たちの口から、貴方様の行動を聞き出そうとする他の軍の者もおるやもしれません。
　閨の中までは監視されませんでしょうが、表ではわかりません。
　我々は、貴方様をヒュンケル様の奥方様としてお仕えいたします。
　ですので、貴方様もその御心づもりでお願いいたします。」
　マァムとしては不満なことこの上なかったが、モルグに強く言われ、逆らいようもなかった。閨の中までは、との言葉に少しだけ安心したせいもある。
　しぶしぶではあるが、マァムは頷いた。
「・・・わかったわ。」
　すると、モルグは、にっと笑みを浮かべた。人懐っこい笑顔だっ

た。
「そうであれば、わたくしどもは、貴方様のことは、奥方様、とお呼びいたします。」
　マァムは顔色を変えた。直ちに反論をする。
「お、奥方様！？
　それはやめて！」
「おや？ご不満ですか？」
「困ります！！」
「これが最も適したお呼びの仕方だとは思いましたが・・・そこまでお嫌でしたら、仕方ありませんな。」
　モルグは、やれやれとため息を吐いた。
　そして、別の提案をマァムに持ち掛けた。
「では、マァム様、とお呼びいたします。」
「さ、様はいらないわ。私、そんなに偉くないもの。」
「いいえ！」
　モルグは、強くマァムをたしなめた。
「ヒュンケル様はこの城の主でございます。
　貴方様は、その奥方様なのですぞ！我々が敬意を払わなければ、ヒュンケル様のお立場に差し障ります！」
　モルグは、ずいっとマァムに顔を近づけ、彼女に迫った。
「マァム様、がお嫌でしたら、では、やはり、奥方様と・・・。」
「わかったわ！わかったから。
　・・・名前でいいです・・・。」
「はい、マァム様。」
　モルグは、にこやかな笑みでマァムを呼んだ。
　なんだか丸め込まれたようで釈然としないマァムではあったが、仕方がない。
　モルグは、憮然とした様子のマァムにかまわず、話をつづけた。
「まず、平素のご生活について申し上げます。
　お食事は、ヒュンケル様のお仕事がございませんでしたら、御一緒にお取りいただきます。
　ヒュンケル様のお世話は、我ら城の者が行いますが、適度にお手伝いくださいますよう、お願いいたします。

その方が、御夫婦らしく見えますからね。」
マァムは、ご夫婦、という言葉が引っかかったが、やむを得なかった。
モルグはそのまま言葉を足した。
「それと、これは、このお部屋の鍵でございます。」
そう言って、１本の金色の鍵をマァムに手渡した。
マァムの掌に乗せられた、金色の大ぶりの鍵には、ピンクのリボンが結び付けられていた。
「マァム様のお部屋は、マァム様がご在室のときには、内側から施錠していただいて構いません。
これは、ヒュンケル様のご指示です。
また、お出かけの際には、こちらの鍵をお使いください。」
マァムは、意外な思いで手の中の金の鍵を見つめながら、モルグに尋ねた。
「・・・ヒュンケルが？」
「はい。
ヒュンケル様がマァム様に御用の際には、お声がけをなさると。突然お部屋にお伺いされることはないそうです。」
「・・・そう。」
つまり、マァムは、自室では、安心して過ごしてよいということだ。
その心遣いにほっと息を吐いた。だが、同時に、実質は人質であり、妻だというのは形だけに過ぎない自分に対し、このような配慮をするヒュンケルの人となりがわからなくなっていた。

マァムは、一人寝のベッドの上で寝返りを打った。
この地底魔城で過ごすようになって数日が経ったが、やはり、慣れない。
ヒュンケルの言葉どおり、待遇は、悪くはなかった。
日常の世話は、彼女付きの侍女が行ってくれる。
ヒュンケルとは、三度の食事のほかは、時折、顔を合わせるくらいで、接触は、意外なほど少なかった。
彼が、彼女の部屋を訪れることもなければ、夜伽を命じられるこ

ともなかった。
　それでも、此処での生活は、心安らぐものとは言い難かった。
　マァムは、逃げ出すこともできず、外の情報もほとんど与えられておらず、焦燥だけが募っていった。
　マァムは、ベッドの上で何度も寝返りを打った。
　眠れない。
　時刻はすでに夜更けになっているはずだった。
　日差しのささないこの地底の城では、時計が重要だ。
　マァムの部屋に置かれた時計が、こちこちと規則正しい音を立てる。
　故郷の村で過ごしていたときには、彼女は、日の出とともに起き、日没とともに休む生活をしていた。
　太陽とともに過ごす生活を長年送ってきた彼女には、陽の光の恩恵を受けない暮らしは、慣れないものであった。
　ひとりになると、様々なことが胸の中を去来した。
　仲間たちはどうしているのだろうか。
　ダイは、ポップは、どうなっただろうか。
　自分の身を案じてくれているだろうか。それとも、ヒュンケルの言うとおり、裏切ったと思われているのだろうか。
　ダイもポップもそんな考えはしないと思いつつも、ひとりになると不安が胸を去らなかった。
　自分を信じて送り出してくれた母や村の人々にも、申し訳が立たなかった。
　故郷の村にも、この触れは届いているのだろうか。であれば、母や村の人々は、この状況をどう思っているのだろうか。
　視界がにじみ、マァムの頬を涙が伝った。
　彼女は、暗い方に傾きかけた思考を無理矢理中断させると、ベッドから這い出た。
　そして、寝巻のまま、部屋の外に出た。

　地底魔城の廊下を歩きながら、マァムは途方に暮れていた。
　眠れなくなった彼女は、厨房に行き、何か飲み物をもらおうと思っていた。しかし、複雑に入り組んだ地底魔城の廊下は、どこが

どこにつながっているのか、此処で暮らすようになって間もない彼女には理解できていなかった。
　すっかり迷子になった彼女は、当てもなく、城の廊下をさ迷い歩いた。
　ふと、彼女は、開いた扉から漏れる明かりがあることに気付いた。その灯りに吸い寄せられるように、彼女は、扉の中に入っていった。

　そこは、練兵場であった。
　おそらく、闘技場から続く間に位置しているのであろう。
広いホールのようなその場は、壁に沿って、いくつもの剣や槍が整然と、立てかけられていた。ここで何十人もの兵士たちが鍛錬を行うように作られていることが、容易に推測できた。
　深夜であるにもかかわらず、練兵場には、明かりがついていた。
　見ると、練兵場の真ん中で、男が一人、剣を振っていた。
力強く剣が振り下ろされる。
　何度も、何度も。
　空を切る、素振りの音が、遠く離れたマァムの元まで聞こえてくるようであった。
　男は、上半身は素肌をさらしていた。
　剣が振り下ろされるたびに、男の裸の背中を汗がほとばしるさままで見えるような気がした。
　その無駄のない動き、美しく整った型に、マァムはいつの間にか、魅了されていた。
　彼女は、村の守り手として過ごしてきた。村には、ロモスの王城の警備に出ていた若者も多くおり、剣を持つことも自分たちの身を守ることも、彼女の日常の中にあった。
　だが、目の前の男の動きは、彼女の知っている男たちのものとは全く異なっていた。
　寸分異ならず、同じ動作が繰り返される。
　力強く、それでいて、一切の無駄を削ぎ落したその動きに、マァムは美しささえも感じていた。
　マァムは、声を掛けることもせず、ただ黙って、男の鍛錬を見つ

めていた。
　どのくらいそうしていたのだろうか。
　彼女の視線に気付いたのか、男がゆっくりと振り返った。
　練兵場の入り口付近にマァムが佇んでいたことに驚いたのか。
　彼は、普段は鋭いその目をわずかに丸くさせた。小さく動いた唇は、彼女の名を呼んだように思えた。
　彼は、そのまま、黙って、彼女に近付いてくると、彼女に声を掛けた。
「こんなところで何をしているんだ。もう夜更けだ。」
　マァムは、夢から醒めたようにはっとした。慌てて、ヒュンケルから視線を逸らした。彼の動きとはいえ、自分を捕らえているこの男に見惚れていたとは知られたくなかった。
　それに、ここまで来てしまった本当の理由も、言葉にしづらかった。
　マァムは、言いにくそうに口ごもった。
「・・・眠れなくて。」
「そうか。」
　すると、思ったよりも、ずっと柔らかい口調で、ヒュンケルが答えた。そして、そのまま黙って彼女の側にたたずんでいる。
　マァムは、ヒュンケルの声色に少しだけ安心感を覚えた。
だからだろうか。
　彼女は、そのまま、ぽつりぽつりと、言葉をつづけた。
「・・・私、ずっと大勢の中で暮らしていて・・・村にいるときもそうだったし、旅に出てからも、ずっと、ダイやポップがいたから・・・こんなふうに、ひとりでいるのに慣れていなくて。
　ここでは、おひさまも見えないし・・・。」
「この城にいるのは、アンデッドモンスターばかりだからな。」
「モルグさんも、侍女のみんなも、よくしてくれているんだけど・・・。」
　マァムはそこで口をつぐんだ。
　彼女は、それ以上言葉を継げなくなり、静寂が流れた。
　すると、少しして、ヒュンケルの声が聞こえてきた。
「・・・お前はそう思うんだな。」

「えっ？」
　マァムは、なんのことを言われているのか分からなかった。顔を上げて、彼を見上げる。
　だが、ヒュンケルは何も言わなかった。ふたつの視線が邂逅する中、ただ、沈黙が静かにその間に広がった。
　しばしの静寂の後、ヒュンケルが口を開いた。彼は、それまでとは方向性の異なる言葉を口にした。
「何か飲み物でも持って行かせよう。眠れるようにな。」
　その言葉に、マァムは驚いた。ちょうどそう思っていたのだが、マァムが言い出す前に、彼女の希望通りのことを口にしたヒュンケルを、マァムは、驚いた顔で見つめ返した。
「あ・・・ありがとう。」
　彼女の視界に、すぐそばに立つヒュンケルの姿が映っている。ヒュンケルは、先ほどの鍛錬のときと同じく、上半身はその素肌を晒したままだった。引き締まった肉体は筋肉に覆われており、無駄がない。均整の取れた戦士の肉体であったが、やはり、これまでマァムが見てきたどの男たちよりも、力強さにあふれていた。
　マァムは、至近距離で、そんな姿のヒュンケルを見上げているうちに、頬を赤らめた。おそらくは、ヒュンケルの方には、そんなつもりはないであろうに、強く男性性を感じさせられ、マァムは戸惑った。
　マァムは話題を逸らした。
「ヒュンケルはなんでこんな時間に・・・？」
「昼間だと部下たちの目がある。なかなか自分一人で集中できないからな。」
　そう言いながら、彼は、近くに放置されたままになっていた自分のシャツを取りに行った。袖を通す気配がして、マァムは、ほっと胸を撫でおろした。
　ヒュンケルは、身支度を整えると、マァムに向き直った。
「部屋には自分で戻れるか？」
「・・・自信ない。」
「わかった。送っていこう。」
　その言葉は、どことなく苦笑しているようにも感じられた。彼

は、普段、不死騎団長として見せる顔よりも、少しだけ、年相応の青年のように思えた。

　ヒュンケルは、いったん、厨房に寄って、侍女の一人に声を掛けると、マァムを彼女の部屋まで連れて行った。
　その道行では、ヒュンケルの方はほとんどマァムに話しかけなかったから、なんとなく、マァムは自分の話を続けていた。
　生まれ育った村のこと。
　母のこと。
　ふたりのおとうと弟子のこと。
　他愛のない何気ない日常の思い出語りであったが、意外にも、ヒュンケルはマァムの話に耳を傾けてくれていた。
　ヒュンケルの方から口を開くことはなかった。しかし、マァムを無視することもなく、時折、相槌を打つ。マァムは、ヒュンケルが自分の話を聞いてくれていることに、思いがけない居心地の良さを感じていた。
　やがて、マァムの部屋の前に着くと、ヒュンケルが足を止めた。
「ほら、お前の部屋だ。
　すぐに侍女が何か飲むものを持ってくる。」
「あ・・・うん。
　えっと・・・ヒュンケル。」
「なんだ。」
「あ、ありがとう・・・。」
　マァムは、やっとのことで、ヒュンケルに礼を言った。この城に来てからというもの、ヒュンケルに対しては抵抗をするか、反論をするばかりで、礼を述べたことなどなかった。こんなささやかなことではあったが、ほんの少し、彼の自分に対する態度が和らいだように、マァムは感じていた。
　だが、マァムが礼を述べても、ヒュンケルは何も言わなかった。
　不思議に思ったマァムがヒュンケルを見上げると、彼はただ黙って、真っすぐにマァムを見つめていた。
　マァムは、彼の名を呼んだ。
「ヒュンケル・・・？どうかした？」

「・・・いや。
　礼を言われるようなことではない。」
　そしていったん、口を閉じると、ヒュンケルは、淋し気な笑みを浮かべた。
「お前は、愛されて育ったんだな。」
　その言葉と、悲しみさえも感じられるその微笑みに、マァムはどきりとした。
「もう遅い。ゆっくり休め。」
　それだけ言うと、ヒュンケルは、踵を返した。そのとき、小さなつぶやきが、マァムの耳に届いた。
　マァムは、ヒュンケルに声を掛けようとした。だが、何と呼び掛けてよいのかもわからず、マァムは声を出せなかった。
　そのまま、彼は、自分の部屋の方へと足を進めていった。
　遠ざかるその背中を見送りながら、マァムは、先ほど耳に届いた、ヒュンケルのつぶやきを胸の中で繰り返した。
—俺はずっと、ひとりだった・・・。

　その夜に飲んだカモミールティーは、涙の味がした。

　その日、マァムは、モルグから、夕食後、ヒュンケルの部屋に来るように言われていた。指定された時間が時間だったので、不安がよぎった。だが、侍女を伴ってよいと言われたので、マァムは幾分か安心して、彼女付きの侍女とともに、ヒュンケルの部屋を訪れた。
　入室を許可されて、部屋に入ると、ヒュンケルとモルグが向かい合って椅子に座っていた。
　ヒュンケルの部屋はいくつかに別れていたが、此処はそのリビング部分に当たっていた。
　部屋の中央には、ソファーセットが置かれていたが、ヒュンケルは、モルグとともに、何故か、部屋の端のテーブルセットについて、相対していた。
　不思議に思ったマァムが近づいてみると、合点がいった。そのテーブルは、通常のものとは異なっていたのだ。

その部屋の端に置かれたテーブルの表面には、チェス盤が描かれていた。正確な正方形が６４個描かれており、そのところどころのマスに、駒が置かれている。
　見ると、モルグの方は、いつも通りの穏やかな笑みを浮かべており、一方のヒュンケルは、盤上を睨んだまま、身動き一つしていなかった。
　モルグは、楽し気な声色で、主に呼び掛けた。
「さて、ヒュンケル様。
　このチェックから逃げられますかな。」
　ヒュンケルは、しばらく黙っていた。モルグを見上げることなく、じっと盤上を睨み、思索に暮れているようであった。
　だが、しばしの後、ヒュンケルはうめくように答えた。
「・・・無理だ。」
　すると、モルグが手を伸ばし、駒を１つ、動かした。
「チェック・メイト。」
　ヒュンケルは、大きくため息を吐いた。
「さて、今晩はここまでですかな。」
　そう言うと、モルグは、普段通りの笑みのまま、盤上の様々な位置に配置されたチェスの駒を、1つずつ元の位置に戻していった。駒を戻しながら、モルグはヒュンケルに語り掛けた。
「ヒュンケル様は、お手が素直すぎるのでございますよ。
　どうされるかな、と、わたくしが想像するいくつかの手の中で、最も素直なお手を打ちなさる。
　もう少し、相手をはめる、相手の裏をかくようなお手を覚えなさいませ。」
「・・・お前が老獪すぎるんだ。」
「お褒めいただき嬉しゅうございますな。」
　ヒュンケルとモルグがチェス談議に花を咲かせていると、マァムとともに来た侍女が、控えめにモルグに声を掛けた。
「モルグ様。」
　その声に、モルグが二人に視線を送った。モルグは椅子から立ち上がり、マァムに頭を下げた。
「ああ、すみません。

お待たせいたしましたな、マァム様。」
「あ、はい。」
　それまで、マァムは、じっと、チェス・テーブルを見つめていたが、モルグに呼びかけられ、ひと息遅れて、顔を上げた。
　マァムと視線を合わせたモルグは、笑みを浮かべたまま、マァムに尋ねた。
「チェスが、お気になりますか？」
　マァムがチェス・テーブルをじっと見つめていたことにモルグは気付いていたのだとわかり、マァムは彼に答えた。
「・・・村でも、長老様とか、大人の人たちがさしているのはよく見ていて・・・。私も少し教わったの。」
　すると、その言葉に、ヒュンケルが食いついた。
「何だ、お前、させるのか。」
「少しだけよ。」
「なら付き合え。
　ここのところモルグとばかりで飽きていたところだ。」
「え、いいの？」
　早速、ヒュンケルは、モルグが途中まで戻していたチェスの駒を揃え始めた。彼の駒を扱う手つきは慣れており、そんなところからも、マァムは、村の風景を思い出した。
　モルグは、マァムに着座を促した。マァムは、椅子に座ると、モルグを見上げ、尋ねた。
「でもモルグさん、何か私に用があったんじゃないんですか？だって、ヒュンケルの部屋に来てほしいって・・・。」
　すると、モルグは、うなずきながら答えた。
「ああ、そのことでございますか。
　やはり、ときどきは、夜にヒュンケル様のお部屋を訪れていただいた方がよろしいかと思いまして。」
「よ、夜って・・・！」
「何も、夜中まで、とは申し上げません。お部屋の行き来が全くなくては、御夫婦らしさが乏しくなりますからな。
　チェスをさされるのでしたらちょうどよろしい。」
　そう言うと、モルグは、マァムと一緒に部屋に入ってきた侍女に

振り返って指示をした。
「おふたかたのお世話、お頼みいたしましたぞ。」
「はい、モルグ様。」
　そのまま、モルグは、ヒュンケルの部屋を後にした。
　マァムは、かつて、村の大人たちに教えてもらった記憶をたどりながら、ヒュンケルとチェスをさし始めた。
　ふたりとも盤上に目を落としていたために、視線は直接交錯しなかった。そのせいか、マァムの緊張感が薄れた。
　少しすると、侍女が温かいお茶の入ったカップを、二人にそれぞれ差し出した。ほんのりと湯気が立ち上る。
　ヒュンケルが、駒を動かしながら、呟いた。
「モルグが、あまりにお前との接触がなさすぎると俺に言ってきてな。体裁の問題なんだろうが、疎遠すぎると困るというのだ。
　嫌だろうが、たまには付き合ってくれ。」
　その意図が測りかね、マァムは返事を躊躇した。モルグの言う「接触がなさすぎる」というのは、つまり、夫婦としての接触がないとの意味ではないだろうか。先ほども、モルグがわざわざ「夜」と言ったことが、マァムは気になっていた。
　マァムが何も答えずにいると、ヒュンケルは言葉を足した。
「心配しなくても、お前の嫌がることはしない。」
　それが何を指しているのか、マァムはすぐに気づき、頬を赤らめた。だが、言わなくてもいいはずのことを、わざわざ言葉に出して告げた彼の態度に、マァムは、ヒュンケルの誠意を感じていた。
「・・・あ、うん。」
　マァムはうなずき、ためらいながら、盤上の駒を前に進めた。
　ヒュンケルは、やはりチェスの駒を動かしながら、マァムに尋ねた。
「不自由はしていないか？」
　マァムは、ヒュンケルの問いを意外に思った。
　もちろん、地底魔城から外に出してもらえない扱いは不自由なことこの上なかったのだが、それを口にするのは、なんとなく憚られた。
　互いに視線を合わせずに言葉を交わす状況に安心していたマァム

は、素直に、彼に答えた。
「うん・・・お城の中では・・・。
　みんなよくしてくれるし・・・。
　でも・・・。」
「なんだ？」
「私、自分のことは自分でやるのが当たり前だったから、こんな風に人にお世話してもらうのって慣れなくて・・・。」
　村育ちのマァムには、侍女たちに傅かれる生活ということ自体が異質だった。
　だが、ヒュンケルは、当たり前のように答えた。
「そこは仕方がないな。
　俺はあいつらの主で、一応、お前は俺の妻なのだから。」
「その言い方やめて。」
　ぴしゃりとヒュンケルの言葉を制したマァムに向かって、ヒュンケルは不満げに呟いた。
「何だ、つれないな。」
　予想しなかった反応に、マァムの方が戸惑った。
「な、なによ・・・！無理矢理こんな状況にしたのは、貴方でしょう？」
「わかっている。冗談だ。」
　そう言って、ヒュンケルは、口の端に笑みを浮かべた。
　マァムはヒュンケルの態度に翻弄され、盤上の駒の動きが頭に入らなくなった。
　やがて、ヒュンケルが、最後のコマを動かした。
「チェック・メイト。」
　今度は、その宣言をしたのはヒュンケルの方だった。マァムはぐっと息を飲んで答えた。
「・・・私の負けね。」
「今日はここまでにするか。」
　ヒュンケルは、そう言うと、チェスの駒を片付け始めた。マァムもそれに倣う。
　ヒュンケルが、チェス・テーブルの引き出しを引くと、そこは駒の収納庫になっていた。

マァムも引き出しを開け、ふたりで盤上のあちこちに配置された駒を手にとっては、引き出しに戻す。
　そうしているうちに、ヒュンケルの手が、チェスの駒を握るマァムの右手に触れた。
「あ、すまんな。」
　ヒュンケルは、軽くマァムに詫びた。
　マァムは、駒から手を離し、さっと、右手を引いた。その身に引き寄せた右手を、左手でかばった。
　だが、ヒュンケルは、マァムのそんな態度を気にしていない様子で、黙々とチェスの駒を片付けていた。
　マァムは、ヒュンケルの手が触れた右手をさすりながら胸の中で呟いた。
—・・・何で。
　この前は、あんな風に、強引にキスまでしたのに・・・。
　何で、謝るの・・・。
　ただ、手が触れただけなのに・・・。
　ヒュンケルの手が触れた右手だけが、火傷を負ったように感覚が残っている。そして、マァムは、たったこれだけのことで動揺している自分自身に戸惑っていた。
　ただ、手が触れただけなのに。

　ヒュンケルは、地底魔城の会議室に、主だった不死騎団の将を集めると、戦況の報告を受けた。
「まず、パプニカ軍の動きはどうだ。」
　ヒュンケルに促され、現在のパプニカ軍の主戦力であるレオナ王女の軍勢に当たっていたヘルクラッシャーの男が答えた。
「はい。
　いったんは、戦端を交えましたが、いまは、パプニカ北東部の砦に籠っています。
　何度か、投石機や弓で攻撃を試みましたが、大した反撃はありません。しばらく出てくるつもりはなさそうです。
　もっとも、こちらも、大軍を配することができない地形ですので、大きな攻撃は仕掛けておりません。」

「援軍を待っているのか・・・。
　砦の位置が悪いな。
　裏は崖、表から行くにしても、道が細いな。」
「はい。攻めにくい状況でございます。」
「おそらくは、各地でのパプニカ敗残兵や民衆の蜂起を待っているのであろうな。
　あちこちで呼応した動きをされると厄介だ。」
　次に、ヒュンケルは、パプニカ王都の警戒に当たらせていたデスプリーストに尋ねた。
「王都周辺はどうだ。」
「はい。
　ヒュンケル様の予測通り、王都周辺では、民衆蜂起の動きがありました。広場に集まって、武器を揃えておりましたので、鎮圧いたしました。」
　さらに、ヒュンケルは、報告を促した。
「ほかの街ではどうだ。」
「これまでに、3都市で同様の動きがありました。いずれも、大事に至らず鎮圧しております。」
「そうか・・・。
　やはり、生死不明だったレオナ王女が生存していたと知れたのが大きいな。」
　デスプリーストは、報告を続けた。
「鎮圧した民衆の中からは、アバンの使徒さえも不死騎団長に抑えられているのだから、もう無理だ、という声も聞かれました。」
「なるほど、その点は、ヒュンケル様の狙い通りでございますな。」
　だが、ヒュンケルは、依然として、厳しい面で、しばし考え混んでいた。彼は、右隣に控えていた、くさった死体の男に指示を出した。
「モルグ。各地に触れを出せ。」
「はい。」
「いままでは、非戦闘民に対しては、不死騎団は攻撃をしてこなかった。

だが、今後は、容赦はしない。
　武器を手にするのであれば、農民であれ、町民であれ、弾圧すると告知しろ。」
「はっ。」
「さらに、パプニカ敗残兵を匿った者も同様だ、攻められたくなければ、各都市代表者がそれぞれ恭順の意を示せ、とな。」
「承知いたしました。」
「その上で、こちらの持っている手札は存分に使え。
　アバンの使徒のひとりは、すでに不死騎団長の手に落ちた。残る使徒も時間の問題だ。その上で、なお抵抗を続けるのか、と示してやれ。」
「仰せのままに。」
　モルグは、ヒュンケルの指示に恭しく頭を下げた。
　ヒュンケルは、パプニカの地図を見ながら、厳しい表情で考え込んでいたが、方針を決めたようだった。
「このまま鎮圧を進めろ。
　ある程度、各地を抑えなければ、レオナ王女と戦端を交えても、背後から襲撃されかねない。」
　しにがみ貴族の男が、おそるおそるヒュンケルに尋ねた。現状は、不死騎団有利に見えるため、ヒュンケルの懸念が実感できなかったのだ。
「敗残兵が、それほどの勢力になりましょうか・・・？」
　だが、ヒュンケルは、迷うことなく断言した。
「なる。
　レオナ王女はまだ幼いと聞いたが、このタイミングで生存を明らかにし、各地の民衆や敗残兵に蜂起を促したのだぞ。機を見る目のある者だ。
　民衆や軍を率いるに足りる器量のある者が立ったときほど、厳しいものはない。
　相当心してかからなければ、寝首をかかれるのはこちらだ。」
　そして、不死騎団長は、厳しい表情のまま、配下の将たちに檄を飛ばした。
「だからこそ、心してかかれ。

各地での蜂起、一切許すな。
どこか1か所だけでも、まとまった軍勢となれば、雪崩のようにパプニカ軍が押し寄せてくるぞ。」
「はっ・・・！」
不死騎団の部下たちは、自らの主に深く頭を下げた。

マァムは、モルグに連れられて、闘技場の観覧席に着いた。
闘技場は、地下に作られた地底魔城の中にあるにも関わらず、空が見える。
すり鉢状の闘技場では、観覧席が高いところに設けられていた。その中でも、ひときわ高い位置にあり、また、他の席からも区切られている観覧席で、マァムは、闘技場の中央に作られた試合場を眺めていた。
マァムをここまで案内してきたモルグは、マァムを座席に座らせると、満足げにうなずいた。
「こうして着座されますと、奥方様らしゅうございますな。」
マァムが座った座席は、座面が手触りの良い天鵞絨で作られており、ひじ掛けにも装飾が施された豪華な椅子だった。
豪奢な座席に座り、最も高い位置から闘技場を眺めているのだから、その地位の高さがうかがえると言いたいのだろう、とマァムは思った。
だが、マァムとしては、不死騎団に権威を及ぼすつもりなど一切ない。反論しようと口を開きかけたとき、モルグが、思いもよらないことを口にした。
「ここは、かつて、ハドラー様も座られた席なのですよ。」
マァムは驚いて、尋ね返した。
「えっ・・・？ハドラーが？どうして？」
「この城は、もともと、ハドラー様の居城でございましたからな。観覧席の中でも、最も闘技場がよく見える、此処は天覧席でございます。そのときどきの、この城の主がここに座るのは当然でございましょう。」
そう告げると、モルグは、闘技場の中央にいるヒュンケルを示した。

「今、この城の主は、ヒュンケル様にございます。
　マァム様には、ヒュンケル様の戦い方をご覧いただきたいと思い、お連れ致しました。」
「・・・どうして？」
　訝しげに尋ねるマァムに、モルグは端的に答えた。
「ご覧になっていただけましたら、お判りいただけます。
　どうも、貴方様は、ヒュンケル様を誤解なさっていらっしゃるようだ。きっかけがきっかけでしたから仕方はないと思いますが・・・。
　マァム様には、是非、我々のよく知るヒュンケル様をご覧になっていただきたく存じます。」
　誤解、という言葉が、マァムの耳に残った。
　ヒュンケルは、不死騎団長だ。
　人間の身で魔王軍に属し、人間に敵対する勢力の男。アバンに師事をしながら、そのあかしを捨て、師に背いた反逆の弟子。
　それが、マァムの知る範囲での、ヒュンケルを構成する要素だった。
　だが、それだけでは語り尽くせない何かがあるのか。
　マァムに、彼女の部屋の鍵を預け。
　手が触れただけでも、詫び。
　この日まで、彼がマァムに無理を強いたことはなかった。
　そして、夜半に見た、彼の眼差し。
ー愛されて育ったのだな。
　そう述べた彼自身は、どうだったのか。
　地底魔城でマァムが過ごすようになって接してきた彼の姿を思い出し、マァムは、じっと闘技場を注視した。
　まるで、そこに、見えない何かを見出そうとするかのように。

　軍隊は、十数人単位で構成される小隊を基礎とし、その小隊を複数束ねる中隊、中隊が集まって構成される大隊となるにつれて、規模が大きくなっていく。
　不死騎団も例外ではない。
　パプニカ軍と戦闘状態にある中での不死騎団の訓練は、きわめて

実戦に近い形で行われていた。
　この日も、もっとも基礎的な構成である小隊ごとに分かれ、まず、白兵戦の訓練をしていた。
　兵士たちが、互いに、木刀や鈍らの剣を構え、打ち合う。
　その兵士たちの間をヒュンケルが歩き、兵士たちの動きを見ていた。
「そこのしにがみきぞく、隙が多い。振りかぶり過ぎだ。」
「は、はい。」
「がいこつけんし、踏み込むスピードが遅い。もっと早く行け。」
「はい！」
　ヒュンケルは、不死騎団の兵士たちに指摘をしながら、彼らの訓練を見て回っていた。
しばらくすると、ヒュンケルは全体に指示を出した。
「小隊ごとに分かれろ。全体の連携を訓練する。」
「はっ。」
　不死騎団の兵士たちが答えた。
　ヒュンケルの指示通り、不死騎団の兵士たちは、小隊ごとに分かれ、整列した。
　その様を確認すると、ヒュンケルは声を上げた。
「第一小隊、前へ！！」
「はいっ。」
「包囲陣を敷け！！」
「はっ！！」
　ヒュンケルの号令とともに、小隊が一斉に動き始めた。その合間にも、ヒュンケルが檄を飛ばす。
「第五小隊、遅いっ！それでは包囲にならん！！」
「申し訳ございません！」
「お前たちが最も早く動かなければ陣にならん！もう一度だ。」
「はいっ！！」
　不死騎団の兵士たちが、同じ動きを数度繰り返すと、ヒュンケルは、さらに、指示を下ろした。
「小隊ごとに配置につけ。」
　各小隊が横並びに配置されると、ヒュンケルは号令をかけた。

「第一小隊、突撃！！」
「はいっ！」
「次、第二小隊！」
　機動力を高め、素早い動きでの攻撃を訓練させる。小隊ごとに、次々と、敵陣への斬り込み想定した訓練をさせていった。
　不死騎団の兵士たちは、彼らの主の指示のもと、鍛錬をつづけた。

　マァムは、天覧席から不死騎団の訓練の様子を眺めていたが、そのさまに息を飲んだ。
まるで、部隊全体が1体の生き物であるかのように、連携して動いている。それも、ヒュンケルの指示のもと、瞬く間に動きを変える。
　軍団長として、不死騎団に指示を飛ばすヒュンケルを目の当たりにしながら、マァムは、慎重に、モルグに尋ねた。
「・・・モルグさん。」
「はい、何でございましょうか。」
「・・・ヒュンケルは、六大軍団長のひとり・・・なのよね？」
「はい。そうでございます。」
「・・・つまり、彼と同格の人が、魔王軍にはあと5人、いるということよね？」
　こうしてヒュンケルひとりを見ても、彼個人の戦闘力もさることながら、その指揮力のほどが窺い知れる。その彼と同格の者があと５人いると思っただけでも、魔王軍に打ち勝つ困難さが思い知らされるようであった。
　マァムの問いに、モルグは、当たり前のようにうなずいた。
「はい。
　そのうちのお一人は、クロコダイン様でいらっしゃいます。
　クロコダイン様には、お会いなさいましたな？」
「・・・ええ。」
「クロコダイン様も、勇猛果敢な方でいらっしゃいますし、戦士としての経験も豊富な方です。
　そのような軍団長の中に、まだお若いヒュンケル様が抜擢されたのは、大魔王様のご期待もあってのことでございましょう。」

モルグの言い回しに、マァムは驚いて尋ね返した。
「六大軍団長の中では。ヒュンケルが一番若いってことなの？」
「一番とは申しませんが、ヒュンケル様よりもご経験豊富な方のほうが多いのは、事実ですな。」
「そう・・・。」
　モルグの言葉に、魔王軍の層の厚さを思い知らされた。マァムは頷くほかなかった。
　モルグは、マァムにかまわず話をつづけた。
「その中で、お年もお若く、人間でいらっしゃるヒュンケル様が軍団長として務められておられるのは、ヒュンケル様の御努力の賜物でございましょうな。
　ほかの方が経験で身に着けていらしたことを、あの方は、ご自身の努力でカバーしてこられたのですよ。」
　マァムは、もう一度闘技場の底を見た。
　見ると、訓練がひと段落したのか、ヒュンケルの前に、不死騎団の面々が整列して並んでいた。
　その彼らを前に、ヒュンケルの声が響いた。
　マァムは、彼の言葉に、耳を傾けていた。

　配下たる不死騎団の一群を眼下に配し、ヒュンケルは、彼らに語り掛けた。
「本日の訓練、ごくろうであった。
　この先、パプニカ軍との厳しい戦いが予測される。
　だが、臆するな！
　我らは必ず打ち克つ。
　そして、我ら不死騎団の住む大地を、モンスターの住む地を人間どもから、取り返す。
　これは、我らの故郷を取り戻すための戦いだ。
　もはや奴らを恐れる必要は、どこにもない。
　人間どもに不当に奪われたこの地を、再び、我らの住む地として、必ず取り戻すのだ！」
　不死騎団長の激励に、地響きのように、不死騎団の者たちの呼応する声がこだました。

訓練を終えると、ヒュンケルは、マァムやモルグを伴って自室へと戻った。
「お疲れ様でございました、ヒュンケル様。」
　モルグは、ヒュンケルを労うと、彼のマントと訓練用の剣を預かった。片づけるのであろう。モルグは、ヒュンケルから預かったものを持って部屋を出ていった。
　ヒュンケルの寝室にはマァムが残ったが、マァムは、何をするでもなく、所在なさげに佇んでいた。
　普段はヒュンケルに対してもはっきりとした物言いをするマァムには珍しく、迷いのある仕草をしていた。ヒュンケルはマァムに尋ねた。
「どうかしたのか？」
「・・・うん。」
　だが、ヒュンケルに促されても、マァムははっきりした返事をしなかった。
　ヒュンケルはさらに尋ねた。
「何か、言いたいことがあるのか？」
「・・・うん。」
　やはり、マァムの返事は煮え切らなかった。
　だが、しばらく沈黙していると、マァムは、思い切ったようにヒュンケルに尋ねた。
「ヒュンケル、教えて。」
「何だ。」
「貴方は・・・なんのために戦っているの？」
　遠慮がちなマァムの問いかけに、ヒュンケルは苦笑した。
「何だ今更。
　始めに言っただろうが。」
　ヒュンケルと初めて出会ったときに聞いた、彼の生い立ちを思い出し、マァムは尋ねた。
「・・・アバン先生を・・・倒す、ため？」
「ああ。」
「・・・本当に？」

「何故そんなことを聞く？」
「だって・・・アバン先生はもういないのに・・・貴方は、魔王軍から去らない。それに・・・。」
　マァムはそこで言葉を区切った。その空白は、ためらいを意味していた。
　ヒュンケルは、問いを促した。
「何だ？」
　マァムは、意を決したように、顔を上げた。真っすぐにヒュンケルを見上げたまま、尋ねた。
「何故・・・この地を取り戻す、って・・・みんなに言ったの？」
　ヒュンケルが不死騎団に向かって鼓舞した言葉は、彼がパプニカ神殿跡でマァムたちに向かって言い放った、師への恨みとは異なるものだった。
　マァムは、ヒュンケルがまだ語っていないことがあると感じていた。
　真っすぐに彼を見上げるマァムを前に、ヒュンケルもまた、マァムを見返した。臆することなく自分を見つめる琥珀の瞳は、ごまかすことを許さない真摯さがあった。
　ヒュンケルは、しばし沈黙していた。
　だが、やがて、遠い日の記憶が零れ落ちるように、彼の唇から言葉が紡ぎ出されて行った。
　ヒュンケルは答えた。
「俺が、初めて地上に出たのは、アバンに連れられてこの城を出たときだった。」
　急に、過去に話が及んだことにマァムは少しの驚きを覚えた。だが、ヒュンケルが語ろうとしている１５年前の出来事は、彼にとっては思い出したくもない辛い記憶のはずだった。その日のことを語る意味の深さを感じ取り、マァムは、ただ黙って、彼の言葉に耳を傾けた。
「アバンは、ハドラーを倒し、その後に、俺を連れて地上に出た。俺にとっては、地上は未知の世界だった。
　地上に出て、俺は驚いた。
　地上の世界は、俺の育った地底魔城とは全く異なっていた。

人間どもが幅を利かせ、大手を振って過ごしている。その中で、モンスターたちは・・・。」
　そこでヒュンケルはいったん口を閉じた。彼は、悔しげに、唇を噛んでいた。
　彼は、マァムに尋ねた。
「マァム、お前は、魔族やモンスターたちとは接したことはあったか？」
「あ・・・うん。少しだけ。」
　マァムは、ネイル村周辺の森に住んでいた、スライムや、一角うさぎ、ももんじゃたちのことを思い浮かべた。
　だが、ヒュンケルは、マァムの言葉に、寂しげな笑みを浮かべた。
「少し、だっただろうな。
　あの１５年前の戦い以降、地上のモンスターたちは、みな、息をひそめるように過ごしていたからな。」
　そして、ヒュンケルは言葉をつづけた。
「地底魔城を出た俺が目の当たりにしたのは、人間たちに怯えるモンスターたちの姿だった。モンスターたちは、人間たちの目から逃れるように、森や山に隠れ住んでいた。
　ひどいときには、街道まで迷って出てきたモンスターを、人間が、追い立てたり、攻撃したりしていたこともあった。
　ハドラーが倒されるまでは、そうではなかったはずだ。地底魔城にいたモンスターたちは、地上と行き来をしていたのだからな。
　その地底魔城にいたモンスターたちも、アバンに殺された。
　俺は思い知らされた。
　人間とモンスターは相容れない。同じ地には住めないのだ、とな。」
「そんなこと・・・！」
「お前は、モルグのことも不死騎団の者たちも、恐れないな。お前が、モルグによくしてもらっていると言ったのを聞いたときには、驚いた。
　だが、そんな者たちばかりではない。それは、アバンとともに、世界を旅した俺が見てきた真実だ。」

ヒュンケルの言葉には、辛酸を味わった者にしかわからない厳しさがあった。
　ネイル村で、母や村人たちの愛情を受けて育ったマァムの目に触れていない、この世界の残酷さをヒュンケルは語っていた。
「俺はこの地底魔城で育った。
　俺を育ててくれたのは、人間ではない。モンスターたちだ。
　この城が落ち、魔王が倒されたことで、モンスターたちは、地上の棲家を奪われた。いまは、地上では、隠れるように生きるしかなくなっている。
　ならば、俺が取り返す。モンスターたちの生きる地を、取り戻してみせる。
　そのために、人間が邪魔であるのならば、俺は何も躊躇しない。
　それが、俺を育ててくれたこの地底魔城のモンスターたちに報いることだ。」
　ヒュンケルは、迷いなく言い放った。
　言葉が切れ、しん、とあたりが静まり返る。
　ヒュンケルは、それ以上は語らなかった。
　そして、マァムもまた、返す言葉もなく、沈黙していた。
　どのくらいの時間が流れただろうか。
　やがて、ぽつり、と床に何かが落ちた。
　はっとしてヒュンケルが、マァムを見る。
　それは、涙だった。
　マァムの大きな瞳から、涙があふれ、頬を伝い、床へと落ちた。
　マァムは、目を見開いたまま、あふれる涙もそのままに、言葉もなく泣いていた。
　ヒュンケルは尋ねた。
「俺を憐れんでいるのか？」
　だが、マァムは黙って首を横に振った。
　マァムは、うつむき、しゃくりあげながらも、懸命に言葉を紡ぎ出した。
「そんなんじゃないわ・・・。
　私・・・貴方のこと・・・冷たい人だって思ってた・・・。冷酷な人だって・・・。」

「そうだな。」
　だが、ヒュンケルの相槌に、マァムは懸命に首を横に振った。
「違うわ！
　だったら、あんなことは言わない・・・！
　貴方が戦うのは、復讐のためじゃない・・・！」
　マァムは気が付いた。ヒュンケルが、いまなお魔王軍として戦う、本当の理由に。
　それは復讐でもなければ、恨みでもなかった。
「貴方が・・・貴方が戦うのは・・・貴方の胸にあるのは・・・。」
「もういい、それ以上言うな。」
　だが、ヒュンケルは、マァムの言葉を遮った。
「俺はお前に泣いてもらえるような男じゃない。
　・・・そんな資格などない。
　だから、泣くな。俺などのために・・・。」
　マァムは、また、強く首を横に振った。
―貴方が戦うのは・・・愛のため、なのね・・・。
　自分を慈しんでくれた、お父さんやそのほかのたくさんのモンスターたち。
　彼らに対する、深い・・・愛。
　彼らが大事だから。
　彼らに報いたいから。
　だから、貴方は・・・人間の身でありながら、人間と戦うのね・・・。
　マァムは、ヒュンケルのモンスターたちに向ける想いの深さを感じ取り、その切ないまでに仲間たちへ向ける愛おしさに涙した。自分でもなぜ涙があふれるのか、マァムはわからなくなっていた。だが、ヒュンケルの、モンスターたちに向ける思いは、マァムたちが同胞に向ける思いと、何ら変わりはなかった。
　涙を流すマァムに、ヒュンケルの戸惑った声が聞こえてきた。
「・・・頼む。泣かないでくれ。」
　同じ言葉が繰り返される。
　不意に、マァムは、自分を包む暖かさを感じ取った。

いつの間にか、男の胸元に抱き寄せられていた。控えめに力を込めた腕に抱きしめられている。そして、先程と同じ言葉が耳に届いた。
「泣かないでくれ・・・。」
　ヒュンケルに抱きしめられていることに気づき、マァムは、とっさに、彼から逃れようとした。
　彼の胸板に、両手をつく。
　だが、そのままヒュンケルを突き飛ばそうとしたマァムは、それ以上力が入らなくなっていた。
　ヒュンケルは、さほど力を込めず、緩やかに彼女を抱きしめていた。抜け出そうと思えば、容易にそこから抜けられる、檻とも拘束ともいえない腕だった。
　それなのに、マァムは、それ以上力を込められなかった。
　ヒュンケルは、マァムをそっと抱きしめ、そして、軽く、彼女の髪にキスをした。
　唇の感覚が伝わる。
　だが、それでも、マァムは、ヒュンケルを突き飛ばせなかった。彼から逃れようとその胸に当てたマァムの両手は、逆に、すがりつくように、ヒュンケルのシャツを強く掴んでいた。
　マァムはそのまま、彼の胸に身を投げ、泣いていた。なぜ涙があふれるのかもわからないまま、マァムは、己を襲った感情の奔流に身を任せていた。
　そして、そんなマァムをなだめるように、ヒュンケルは、マァムを抱きしめていた。時折、髪に触れる唇の感触が、背中を撫でる掌の感触が、マァムの心を慰めていた。

　一人きりの寝室で、ヒュンケルは、ベッドに身を投げ出していた。
　不死騎団長の寝室は、広い。
　一人で寝るには広すぎるベッドに仰向けに寝転がり、ヒュンケルは、目の前に掲げた己の右手を見つめていた。
　右手には、マァムを抱きしめた感触が、生々しく残っていた。その感覚は鮮やかなのに、彼女はもう、ここにはいなかった。

しばし泣かせ続け、感情を落ち着かせると、ヒュンケルはマァムを自室に帰した。いま、ヒュンケルの寝室には、彼のほかは誰もいなかった。
　ヒュンケルは、しばらくの間、自分の右手を見つめていたが、やがて、力なく、その腕をおろした。ぱたりと、右腕がベッドに落ちる。
　ヒュンケルは、ベッドの上で、己の肩からまっすぐ横に伸ばした右腕に視線を送った。
　そこには誰もいなかった。
　それなのに、彼は、その右腕に頭を乗せてまどろむマァムの姿を夢想していた。
　ヒュンケルは、吐息を零した。
—いっそ、この場に呼んでしまうか。
　ふと、そんな考えが、脳裏をよぎった。
　経緯はどうであれ、マァムは、彼の妻なのだ。寝所に召したとして、誰にも責められるいわれはない。
　この場に呼んで、そして・・・。
　だが、ヒュンケルの瞼の裏に、泣き顔のマァムが蘇った。何度、そんな表情の彼女を見ただろうか。
ー・・・だめだ、これ以上は・・・。
　ヒュンケルは、目を閉じた。右手で目元を覆い、そのまま、前髪をかきあげた。
　彼は、何かをこらえるように、きつく唇を噛んでいた。

「危険すぎます！」
　パプニカ北東部の砦で、主の提案に賢者アポロは厳しい声を上げた。
　だが、忠臣の反対に顔色を変えることなく、王女レオナは言い放った。
「危険なのはわかっているわ。でも、これしか手がないの。」
　レオナは、側近のエイミ、マリンに報告を求めた。
「ほかの街からの援軍は、来ないのね？」
「それが・・・。」

気まずそうに言葉を濁すエイミに代わり、マリンが答えた。
「はい。
　王都を始め、何か所かでの蜂起はございました。ですが、ことごとく鎮圧されています。」
　アポロが言葉を継いだ。
「こちらからも、密かに使者を遣わしました。
　ですが、どこも不死騎団からの圧力が厳しく、街を維持するのがやっとの様子であると。
　中には、率先して、不死騎団に恭順の意志を示した市長もおりました。」
「何たることだ！」
　騎士バダックが悲鳴を上げて嘆いた。
　アポロは続けた。
「それだけ、不死騎団からの圧力が強いのでしょう。
　中には、『アバンの使徒さえも不死騎団長の手に落ちたというのに、どう対抗できるのか』という者もおりました。」
　アポロの報告に、レオナは忌々し気にため息を吐いた
「・・・やってくれるわよね、不死騎団長。王都を落とされたんだからわかっていたけど・・・馬鹿じゃあないわね。やりにくいわ・・・。」
　レオナは、毅然とした面持ちで顔を上げると、周囲に居並ぶ側近たちを見回した。
「それでも、私たちは戦わなければならないわ。
　戦って勝つほか、私たちの生きる道はないのだから。
　そのためには、危険な手段だってとらなければならない。
　不死騎団に数で劣る私たちに取れる最善の手段が、これなんだから。」
　王女の宣言に、それまで沈黙を保っていた少年が口を開いた。
「レオナ、ひとりじゃないよ。
　俺も戦う。
　絶対に、守るよ。」
　その言葉に、レオナは嬉しそうに頬を染めて答えた。
「ありがとう、ダイくん。」

すると、ポップがダイの言葉尻に乗った。
「そうそう、俺たちもいるって。」
「あら、君も頼りになるのかしら。」
「ひでえな、お姫さん。
　俺だって、やる気になってるんだぜ。」
　ポップは、口をとがらせてそう言うと、怒りの冷めやらぬ面持ちで、吐き捨てた。
「あの野郎・・・何が花嫁だ・・・。ふざけやがって・・・。」
「・・・君は、不死騎団長に個人的な恨みがあるんだったわね。」
　呆れた顔で、レオナは、ぽつりとつぶやいた。
　レオナは、再び顔をあげて、周囲の側近たちを見回した。その面は、凛としており、少女ながら、威厳に満ちていた。
その小さな肩に、パプニカ王国の命運を一身に背負い、レオナは宣言した。
「私たちの生きる地を、守るのです！」
　王女の言葉に、皆が力強くうなずいた。